

## 「コロナ抗体増に特定抗体」 福島医大・斎藤博士研究者ら発表

12/27 福島民友

福島医大放射線健康管理学講座の斎藤宏章博士研究者（33）は26日、新型コロナウイルスワクチンの抗体の増加には、通常の風邪や黄色ブドウ球菌に対する抗体が関係している可能性があるとの研究結果を発表した。

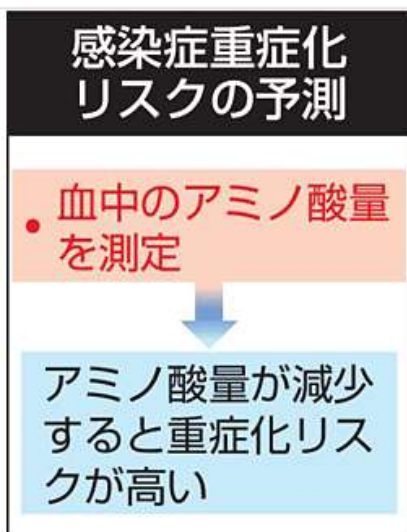
斎藤氏によると、新型コロナはワクチン接種が有効な対策だが、抗体の増加が見られにくい人がいることが知られている。ただ詳しい要因は分かっておらず、斎藤氏は、今回の研究結果がその解明につながる一歩としている。

斎藤氏らは、2回目のワクチンを接種した約90日後の47人の抗体と関係のある微生物の抗体を機械学習で特定した結果、通常の風邪や黄色ブドウ球菌の抗体が関係していることが分かった。黄色ブドウ球菌は、皮膚の表面にいるとされる。

また斎藤氏らは、ワクチンを2〜3回接種する中で実施した4回の採血を解析した結果、ワクチン接種によって日常生活で接する新型コロナ以外の微生物抗体に変化はなかったことも分かった。さらにオミクロン株以前の変異株に対する抗体は3回目の追加接種後に確認できたが、オミクロン株に対する抗体は確認できず、斎藤氏は「2価ワクチンの重要性を示す結果となった」としている。

## 「感染症重症化リスク予測」新手法確立 福島大など研究チーム 12/15 福島民友

福島大食農学類と京都大大学院医学研究科附属がん免疫総合研究センターでつくる研究チームが、血中のアミノ酸量を調べることで、新型コロナウイルスなどの感染症の重症化リスクを予測する手法を確立した。同学類の平修教授は「予後診断や治療方針の決定に応用できる」としている。



研究チームは、新型コロナウイルスに感染した初期から、血中のアミノ酸と核酸に異常が生じていることを確認。重症化するリスクが高い人ほど、血液内のアミノ酸が感染直後から減少していることが分かった。

福島大が成分とその量を色分けできる分析機器「イメージング質量分析装置」で解析を進めた。研究論文は、英国の学術雑誌ネイチャーコミュニケーションズに掲載されるという。

## 「新感染症」850床対応へ 福島県が目標、まん延段階的に確保 12/23 福島民友

新興感染症の発生・まん延時の医療提供体制案			
	国内未発生期	流行初期 (3カ月以内)	まん延時 (3〜6カ月)
入院体制(病床)	32床	460床	850床
外来体制(発熱外来)	—	350機関	680機関
外出自粛対象者への医療(オンライン診療など)	—	—	計790機関
宿泊療養体制	—	200室	1600室

県が13日、福島市で開かれた県感染症対策連携協議会の会合で数値目標案を示した。県が数値目標を定めるのは初めてで、新型コロナへの対応状況を考慮して病床数案などを決めた。本年度内に策定する県感染症予防計画に盛り込む。